

平成15年(2003年)6月1日発行

4月1日より機械工学科教授より教務部長に就任致しました柳澤章です。



基本的視点忘れずに全力傾注

教務部長就任のご挨拶 柳澤 章

生活基盤の確保、健康管理が必要であり、友人との交わり、クラブ活動での学生生活の充実まで、沢山の事柄に意欲的に取り組んでほしいと願っています。その為に大学は種々の組織によって、諸君の学生生活全般をサポートしますが、勉学において得るものがなければ無価値です。教務課は諸君の勉学をサポートします。

新入生諸君、本学では昨年度「新入生の学ぶ力を育てる科目開発」プロジェクトを設置し、その成果を基に本年度からいくつかの新しき科目を始めました。基

本的な目的は、諸君の工学に対する興味、関心を土台にし、これから大学で学ぶ上での基礎となる英語、数学、物理などの実力を身につけてもらおうというものです。本学は君達が単に君達の成績管理をするだけの所ではないことはお分かりでしょう。教務部は、本学におけるより良い教育として研究の発展に努力する責務を負っています。大学は、学生諸君と教職員との共同体です。そして、対話、交流は共同体の生命です。授業で、研究室で、先生方と大いに交流して下さい。サポートを惜しまないつもりです。

工友会の皆さん、私は創立2年目から本学に奉職し

「出張講義」のお知らせ

日本工業大学では、今年も「出張講義」を実施します。「出張講義」とは本学の教員が高等学校に出向いて、高校生に分かり易い講義を行うものです。工業大学の講義の一端に触れることで、高校生の皆さんに、工学の面白さ、ものづくりの楽しさを知っていただきたいと思っています。講義の題目は次のとおりです。

【機械工学科】

1. レーザではじめる物づくり
—レーザでどんな加工ができるだろう?—
2. ダイヤモンドの魅力(合成と応用の現状)
3. SFを通して見るロボット工学
4. 風力エネルギーの利用とNIT風力タービンシステム
5. ナノテクノロジー —小さなchiisanaちいさな機械—

【電気電子工学科】

1. 光ファイバ接続技術
2. 21世紀のキー・テクノロジー
—太陽電池及び超電導体について—
3. 永久磁石と超伝導
4. 人造ダイヤモンド
5. 雷(かみなり)とは?
6. 情報とディスプレイ
7. 光ファイバ通信のしくみ
8. 新幹線の新しいとろり線
9. 真空と半導体開発
10. デジタル計測とコンピュータ
11. 設備の最適配置

【建築学科】

1. 建物基礎と地盤
2. 歴史を生かした町づくり
3. 異文化を解きあかす
—住まい見聞録/教養としての建築—
4. 力の流れと安全
5. 身近な街並みから環境を考える
6. 建築材料のあれこれ

【システム工学科】

1. ドラえもん
—身のまわりのやさしい科学—
2. システム工学: 技術を創る方法
3. ガス管や腸内を走れるロボットのお話
4. ナノテクノロジー(10億分の1メートル)の世界
5. デジタルカメラの仕組みと画像処理
6. 建築の仕組み
7. くもらない鏡のお話
8. 新教科「情報」と大学の情報教育
9. 有限は無限より難しい?
—意志決定問題の面白さ—
10. パズルに使えるグラフ理論

今年も次の日程でオープンキャンパスを実施します。「国際環境規格ISO14001」を取得した心地よいエコ・キャンパスとすぐれた実験施設を、みなさんの先輩学生が親切に案内します。当日は工業技術博物館に動態保存されているSLの運転や、楽しい模擬授業、体験学習、研究室見学などさまざまなイベントがあります。もちろん、学生ホール(大食堂)の定食も無料で食べられます。

●日程 7/19(土)・8/23(土)・10/25(土)

いずれも11時から

●イベント

・施設/研究室開放・模擬授業・入試説明会・AO入試相談会
・入試資料提供・学生食堂無料試食会・グッズ進呈



【情報工学科】

1. 体の不自由な人達に情報技術はどのように役立っているか
2. どこでもコンピュータ

◆お問い合わせ・お申込み先

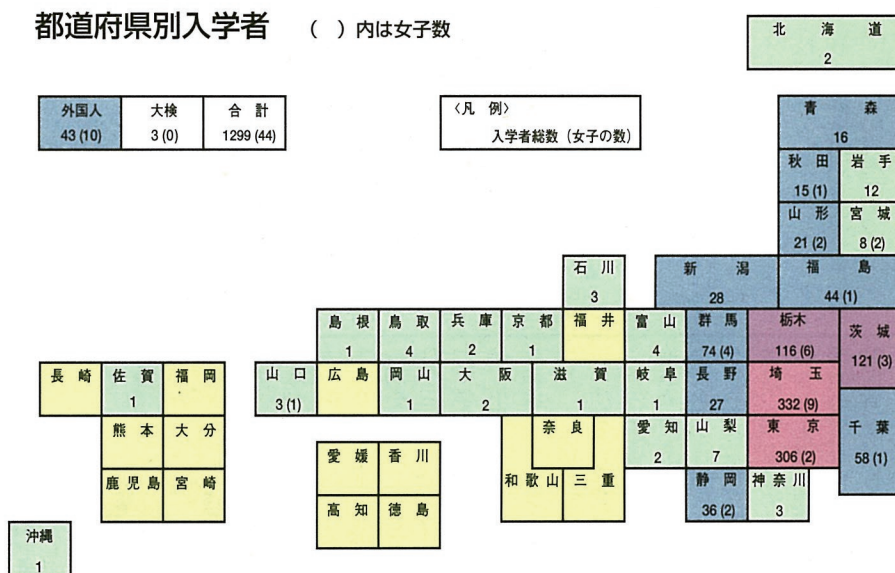
日本工業大学 入試室
〒345-8501 埼玉県南埼玉郡宮代町学園台4-1
TEL: 0480(33)7676
: 0120(250)267
FAX: 0480(33)7678
e-mail: nyu-shi@nit.ac.jp

トップ5都県で73%、女子学生は44名

新入学者の出身地マップまとまる

平成15年度本学学部入学者の都道府県別入学者数を入試室がまとめた。それによると、総入学者は1,299名で、うち女子学生は44名、留学生は43名である。都道府県別入学者数は埼玉332名、東京306名、次いで茨城121名、栃木116名、群馬74名がベスト5。この5都県で合計949名となり全入学者の73%を占める。一方、四国全域と九州6県、それに近畿3県などからは入学者がなかった。

都道府県別入学者 ()内は女子数



●平成15年度 女子学生在籍者(学部) (秋入学も含む)

	機械	電気電子	建築	システム	情報	計
1年	3	6	28	7	3	47
2年	1	4	31	8	10	54
3年	0	3	22	3	9	37
4年	0	0	25	4	7	36
計	4	13	106	22	29	174

●留学生の出身国

出身国	計
中華人民共和国	92
中華民国(台湾)	11
サウジアラビア	10
韓国	9
スリランカ	3
バングラディッシュ	2
コートジボアール	1
タイ	1
計	129

●平成15年度 留学生在籍者(学部) (秋入学も含む)

	機械	電気電子	建築	システム	情報	計
1年	11	9	7	17	9	53
2年	4	5	2	13	9	33
3年	2	7	1	7	4	21
4年	3	3	4	9	5	24
計	20	24	14	46	27	131



見易い「クイック・インデックス」で大学の特色、どんなキャンパスがあるか、学べるか、どんな施設があるか、合わせてのこと。

充実した内容の 平成16年度大学案内発行

に定員枠いっぱい5名の「民法」に2名、古典ギリシヤ語に1名、文科大学の「総合講座」(主に科学哲学を論じる)に2名、「音楽」に1名となっており、やはり実学を重んずる本学学生には、実社会で役に立つイメージのある科目の方が好まれるようだ。

逆に、本学建築学科の「建築と国際協力」「日本建築史」では、各々の学生を他大学から受け入れている。本年度は初回のため、科目数・定員枠とも控えめになっているが、次年度からは拡大される予定である。よりいっそう学生の参加を期待したい。

11名が獨協大・文教大で受講 東部地区単位互換制スタート

本紙1月号でもお伝えした「埼玉東部地区大学単位互換協定」が、今年4月

からスタートした。11名の

11名の内訳は、獨協大学

5年間のスーパーカーボン研究成果を報告 先端材料技術シンポジウム盛大に開催

先端材料技術研究センタープロジェクト成果報告シンポジウムが平成15年3月7日（金）、学友会館において開催された。本シンポジウムは、文部科学省の私立大学ハイテク・リサーチ・センター整備事業の選定を受け、平成10年度から14年度の5年間にわたって先端材料技術研究センター（センター長・村川正夫教授）を中心に機械工学科（宮沢肇助教授、田辺潤助教授、竹内貞雄助教授、中里裕一助教授、野口裕之講師、神雅彦講師）、電気電子工学科（渡辺康夫教授、飯塚完司講師）、システム工学科（渡部修一教授）に所属する10名から成る研究チームにより行われた「スーパーカーボン」の形成とその加工と応用に関するプロジェクト研究成果報告会である。

スーパーカーボンとはダイヤモンドなどの超硬質材料の総称である。これらの材料は、その硬さを生かした機械分野への応用のみならず、半導体、発光素子な



●開会の挨拶をする村川センター長

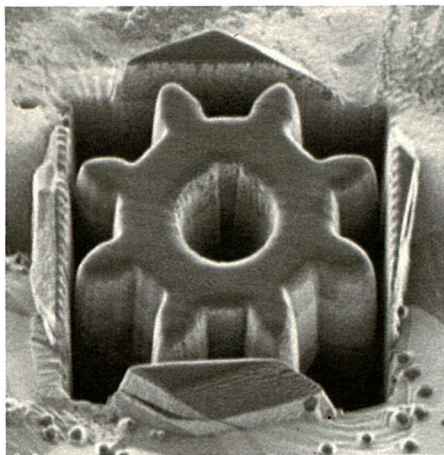


特別講演講師 古賀義紀氏

特別講演講師 三好和寿氏

技術総合研究所・新炭素系材料開発研究センター・副センター長の古賀義紀氏による「炭素系材料の最新動向」と、最も過酷な条件下（宇宙空間）でのカーボン系

「Technology Smart Surface Systems in Wear Coatings」と題した講演が行われた。古賀氏の講演は、最先端の分析技術を駆使したカーボン系材料の状態分析に関するものである。三好氏の講演は宇宙空間での摩擦（トライボロジー）の重要性をわかりやすくかつ、最先端の成果を交えて紹介された。年度末の多忙な時期であったにもかかわらず、前日の日刊工業新聞で紹介されたこともあり、関連の研究者、産学交流会、学園関係者等多くの方々が参加し、



●プロジェクト1で合成した平板状ダイヤモンドからFIB加工により形成した世界最小のダイヤモンド歯車

どのオプトエレクトロニクス関連分野、航空宇宙産業、生体材料など、幅広い応用が期待されている。

今回のシンポジウムでは、村川正夫センター長による概要紹介の後、5年間にわたって行われたプロジェクト研究の成果が紹介された。報告は、プロジェクト1（スーパーカーボンの合成と基本特性評価）とプロジェクト2（スーパーカーボンの加工と応用）の2グループに分かれて、それぞれ2名の代表者が行った。いずれも盛りだくさんの内容で、十分な紹介時間がとれなかったことが残念である。

引き続き特別講演として、我が国の炭素系材料の開発研究の中心である産業

だいた関連の研究者の方々を中心として開催された。大川理事長の挨拶の後、来賓である、吉川昌範氏（ものづくり大学）と佐藤洋一郎氏（物質・材料研究機構）より挨拶を頂いた。いずれも、我が国のダイヤモンドの研究の先駆者である。お二人を含めて、参加された研究者からいただいたコメントの共通点は、プロジェクト間の連携が良くとれているということである。具体的には、プロジェクト1で合成したダイヤモンド膜をプロジェクト2で実用的なマイクロマニピュレータとして実現している点等を高く評価して頂いた。これは、「ものづくり」を標榜する本学の特色が最先端の研究成果にも反映された結果であ

る。懇親会の席では、大川理事長、神馬学長、村川センター長と来賓の方々との間で本学の教育・研究の特色について、貴重な意見交換が行われた。なお、5年間の研究成果は約550ページの研究成果報告書として刊行されることになっている。本プロジェクトの遂行にあたって支援していただいた大川理事長をはじめとする大学関係者に深甚の意を表したい。

8月19日から関連物質応用の国際会議つくばで開催される。懇親会の席では、大川理事長、神馬学長、村川センター長と来賓の方々との間で本学の教育・研究の特色について、貴重な意見交換が行われた。なお、5年間の研究成果は約550ページの研究成果報告書として刊行されることになっている。本プロジェクトの遂行にあたって支援していただいた大川理事長をはじめとする大学関係者に深甚の意を表したい。



●村の入口には歓迎のアーチがつくられた ●N.V.Sの開校式で挨拶する大場氏

平成15年1月、バングラディッシュの村に日本人が作ったハイスクールが開校した。その名もN・V・S（ニッポンボランティア・イアサポートの略称）ハイスクールという。日本での運営責任者は、本学教務部入試室長の大場廣子氏である。

N・V・Sは、平成13年5月にNPO（特定非営利活動）法人の認証を受けて、活動を開始。理事5人のうち3人は教育関係者であり、いずれも埼玉県に在住している。今回のプロジェクトは、識字率40%というバングラディッシュの教育事情を知ったある理事からの「学校を建てよう」という提案から始まったものである。

N・V・Sは、設立から3年間の授業料、教師の給料、その他学校運営費を全て負担するが、その後は公立学校に引き継ぐという。大場氏は「子供が自立するために何よりも教育が必要」と学校運営に対する決意を新たにしている。

学生環境推進委で竹内教授が講演 「環境共生社会への回帰に挑戦」



●竹内淳彦教授

本学では平成13年6月、キャンパス全域でISO14001の認証を取得した。時期をほぼ同じくして、11月からは学生環境推進運動も開始。平成14年5月には「学生環境マネジメントマニュアル」を完成させる等の独自の活動を行ってきた。その学生自治会学生環境推進委員会主催の第1回講演会が、4月26日（土）に本学学友会館で、学生・教職員・他、多数の地域住民の参加を得て開催された。講演者は本学代表環境管理責任者である竹内淳彦教授で、講演題目は「地球環境

問題への挑戦：ISO14001と日本工業大学」と題するもの。講演会は、宮内智君の司会で午後1時30分より開始された。はじめに主催者側を代表して森上泰康・学生環境推進委員長が「学生環境推進運動も3年目に入り、この度、第1回講演会を開くことができました」と挨拶。その後、大学側を代表して船橋学生部長より「今後、幾つかの企画が実施されるので、より良い方向で、学生環境推進運動に結



環境マインドの第3段階としてISO14001を取得

びつくことを期待したい」との挨拶があった。以下は、竹内教授の講演要旨である。竹内教授の講演は先ず、歴史的に見た環境破壊から始まった。古代、さらにギリシャ・ローマ以来ヨーロッパにおいて、人間が樹木を乱伐して使用したことがその環境破壊の始まりであり、資源の枯渇と共に、次第に現地の自然を侵し、生活を否定しながら海外へ拡大していった。例えば、イギリスは、スリランカの森林を伐採してプランテーション化し、大規模にお茶

の栽培を行い、イギリスが去った後も未だに自然は回復していない。環境破壊の第一段階である。他方、イギリスで産業革命が起こり大量の石炭が使用され、酸性雨・大気汚染等が発生した。これが環境破壊の第二段階である。工業化は、時代と共に全世界に拡大し、環境汚染は局地的汚染から地球規模の汚染へと広がった。その結果、地球環境問題は、ヨーロッパの欲望の限界を意味し、この問題の解決以外に生きる道はないと結論付けたのである。環境汚染が地球環境問題として認識されるに従い、1992年6月、「持続可能な開発のための経済会議」が開催され、ISOに国際環境基準の制定を依頼した。その結果、1996年に制定されたのがISO14001である。

ところで、日本では、自然と共生してきた2万年の歴史がある。日本独自の生態系が形成されていた。それが、一挙に崩れたのは1960年以後の高度成長時代であった。しかし、高度成長時代の公害問題を経験した日本は、その反省から環境共生社会へと回帰を始めた。環境と共生し、持続的な発展を目指した環境対応が、企業存立の基本条件となったのである。リサイクルを中心とした「静脈産業」と呼ばれる環境関連産業が、北九州などの先進的な都市で盛んになってきたのは、その現れである。さて、日本工業大学ではこれまで環境問題に取り組んできた歴史がある。第一段階はクリーン・グリーン計画であり、水田を造成して作られたキャンパスに樹木を植えることから始まった。第二段階は、太陽光を利用した発電・トイレの雨水利用・食堂のゴミの堆肥化等



●充実した図書館の後援会文庫の棚

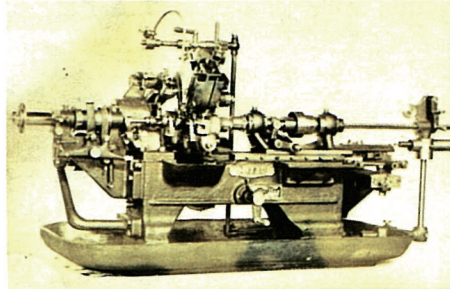
同図書館の京野課長によると利用者の増加は、DVDなど視聴覚素材の充実も関係しているのではないかと述べている。また、同図書館には後援会・在校生父母の会から寄贈された図書が収納された「後援会文庫」の棚も新設され、学生諸君の活発な利用が期待されている。ちなみに同文庫には生活雑学・料理・健康など学生生活・下宿生活に役立つ図書がぎっしり並んでいる。

後援会文庫の棚も新設
図書館コミックコーナーを
朝日新聞が紹介

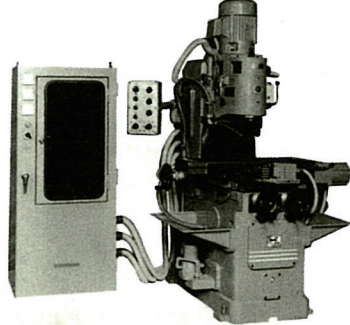
第5回 歴史的な工作機械の顕彰

4企業に楯を贈呈

ベストテクニカル賞



シチズン時計株式会社
自動旋盤 AB形

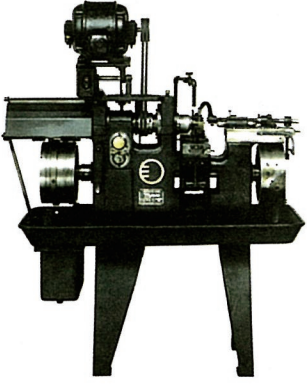


株式会社松浦機械製作所
プログラム制御立フライス盤
SB-1形

ロングライフ・ベストセラー賞



株式会社カンフジ
生産ホブ盤 KS-14形



株式会社ミヤノ
主軸固定型自動盤 AL-S25形



工業技術博物館
館長・教授
松野 建一

「歴史的価値のある工作機械を顕彰する会（事務局・当博物館）は5月29日（木）学友会館において今年の表彰式を挙行政した。

昨年9月に公募した結果、当博物館後援会、工作機械関係の企業・個人から新

「顕彰機械の概要」

シフジのホブ盤と（株）ミヤノの自動盤の2機種、ベストテクニカル賞にシチズン時計（株）の自動旋盤と（株）松浦機械製作所の立フライス盤の2機種の顕彰を決定した。

表彰式では、審査報告に続いて特別顧問の大川陽康理事長から4企業に顕彰楯を贈呈され、受賞者代表の謝辞、記念撮影の後、後援会員の懇親会を兼ねた祝賀会が開催された。

本顕彰制度は年々知名度・評価が高まっており、これまでの顕彰20機種のうち当博物館に展示されている11機種は来館者の注目を集めている。

なお、後援会会長兼顕彰する会会長の和木田國男氏が去る3月24日にご逝去されたことは誠に痛恨の極みであり、衷心よりご冥福をお祈りしている。

「松浦機械製作所・プログラム制御立フライス盤SB-1形」3方向にボールねじを使用し、独自の電気制御技術応用のプラグボード方式で0.02mm以内の精密停止を実現した比較的安全で高性能な機械で、現場での一人多持ち運転を可能にし、省力化に貢献した。

「シチズン時計・自動旋盤AB形」スイスタイプ小型自動旋盤で、時計部品等各種精密小物部品の加工に使われた。軸受に独特のすきま調整機構を持たせて高精度の主軸回転を保証し、被加工部品の相互差を5μm以内に保持し、以降の自動盤高精度化の基礎となった。

「カンフジ・生産ホブ盤KS-14形」従来機種を高速・高精度化し、さらに小型・自動化したもので、高速重切削用ホブ盤として国内全自動車メーカーに設備されるなど、歯切り加工用機械としては稀有の累計1,200台の販売実績をあげた。

華中科技大学との交流に尽力

帰任の黄教授、苦心談や抱負を語る



黄 一夫教授

本学と華中科技大学（中国・武漢市）との国際交流等に力を尽くした黄一夫（こういつぶ）教授が去る3月31日、本学を定年退職し中国へ帰任したが、帰任後もこれらの成果をさらに発展させたいと本紙にその抱負を寄せた。そこで同教授の苦心談や今後の期待などについてお話を伺った。

同教授は1981年6月に来日し、東京大学の特別研究生となったが、1982年以後、日本工業大学と華中工学院（当時）との交流を推進し、当時の大川教務部長（現理事長）らに申し入れて交流を実現させた。以来20年を超える両大学の交流が実現し、華中科技大学には今後中国では、日本企業の中国進出のコンサルティングや、日中の工業教育の比較研究などを行いたいとその抱負を述べている。

華中科技大学一行が本学を訪問、大川理事長らとも懇談



華中科技大学（学長樊明武氏、副学長劉猷君教授ら一行6名が去る3月23日から25日まで来日し、3月24日に本学を訪問。各施設を見学後、大川理事長、神馬学長らと会食した。同席には黄一夫教授夫妻も出席し懇談した。来日した一行の氏名等は次の通り。

劉猷君・副学長・神馬学長、大川理事長、神馬学長、劉猷君・副学長、王海洋・学長、廣瀬教授、李正文・宣伝部長、李軍・大学院主任、別敦榮・高等教育研究院副院長、程潤文・国際交流処処長補佐

厳選採用を徹底する企業

—数合わせの採用はしない—



●人事担当の説明を真剣に聞く学生達（学内合同企業説明会）

ことしの就職戦線の見通し

就職課長 荒井清美

「君はこれまで何をやってきたのか、これから何をやりたいのか。これは、企業が学生に最も聞きたいことである。」

これに対する確かな自信を持って答えられる学生とそうでない学生に対して、企業の人事担当者の見方はおのずと異なってくる。

企業が人材の質を重視する傾向は今年になって益々顕著になっており、新卒採用についても厳選採用を基本とし、企業として必要人材を確保するという人事戦略を徹底している。言い換えれば、量より質の考え



去る4月13日、越谷コミユニティセンターにおいて「埼玉県9大学による吹奏楽コンサート2003」が開催された。電気電子工学科3年の高根沢真君は、サクソ奏者として今回のジョイントコンサート成功の立役者となった。

そもそも「ジョイントコンサート」って、どんなコンサートなの？と高根沢君に聞いてみた。年に1回開かれる埼玉県内9つの大学による合同演奏会のようなものだ、と彼は語ってくれた。今年で11回目を迎えたコンサートも、最初は文教大学と埼玉大学の2校でのスタートだった。我が日本工業大学吹奏楽団も6、7年前から参加している。



高根沢真 君
電気電子工学科3年
（那須清峰高校出身）

吹奏楽の素晴らしさを知ってほしい

今回特に力を入れたのは宣伝活動だった、と高根沢君は振り返る。会場となる東武線新越谷駅周辺の各家庭にビラを撒いたり、各大学の定期演奏会で毎回声を掛けていく人々たちにも開催

大学との連絡も取りにくく、連絡網まで作ったが、それでも難しい。今年になってから月1回、演奏会までたった5回の練習だった。一緒に演奏できたことは、彼自身にとって非常に良い経験となった。

サクソの音色に惹かれて

村川正夫教授、 日本塑性加工学会副会長に就任

日本塑性加工学会最優秀賞「会田技術賞」を受賞



平成15年5月24日に開催された、(社)日本塑性加工

学会総会において、本学機械工学科の村川正夫教授(先端材料研究センター長兼)が、同学会の副会長に推挙され、同日就任した。日本塑性加工学会は、戦後日本の鉄鋼や自動車産業の発展に大きく貢献し、現在

任は、これらの活動が評価されたものであろう。さらに同教授は、本総会後に開催された贈賞式において、日本塑性加工学会で最も権威ある最優秀賞「会田技術賞」を受賞した。受賞の理由は、長年にわたり同教授が研究を進めてきた「せん断加工」および関連技術に関する優れた研究成果が評価されたものである。

佐々木君が 研究奨励賞受賞



大学院機械工学専攻博士後期課程1年の佐々木富幸君(小倉研究室所属、湯沢商工高出身)が、「3次元カ

ムによる連続吸排気可変バルブタイミング機構に関する研究」の論文で自動車技術会より研究奨励賞を受賞した。

同君の論文は、ディーゼルエンジン内に3次元形状のカムを採用することにより、エンジンの吸排気効率を向上させて、高トルク・低燃費の可能性を示唆したものであり、環境への寄与が期待される。

野城君が 学術奨励講演賞受賞



大学院システム工学専攻博士後期課程1年の野城淳一君(渡部研究室所属、千葉工業高校出身)が、「硫化物系固体潤滑積層膜の真空

博士号取得 おめでとうございます



金 鍾得
◆システム工学専攻
博士後期課程3年

【論文題目】ダイヤモンド系薄膜のマイクロトライボロジーとそのシリコンナノ加工への応用
【経歴】1973年2月生。平成12年3月本学大学院工学研究科博士前期課程システム工学専攻修了。平成12年4月同研究科同専攻博士後期課程入学。



胡 炳群
◆システム工学専攻
博士後期課程3年

【論文題目】切削および研削加工特性向上技術の研究
【経歴】1968年6月生。平成12年3月本学大学院工学研究科博士前期課程システム工学専攻修了。平成12年4月同研究科同専攻博士後期課程入学。



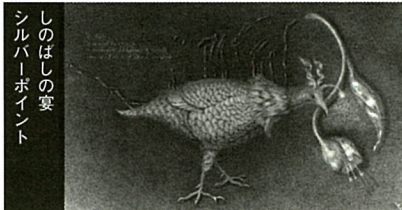
関根 幸男
◆システム工学専攻
博士後期課程3年

【論文題目】ナノ周期積層膜の形成とトライボロジー特性に関する研究
【経歴】昭和50年3月生。平成11年3月本学大学院工学研究科博士前期課程システム工学専攻修了。平成11年4月同研究科同専攻博士後期課程入学。

近事片々

一人、パリから半日かけてロシヤの協会に向かった。そこで決意したことがある。「画家になろう」ということであった。コルビジエの建築を覗いて回って深く感じたことは「自身にリアルに生きる」ということであり「瞬間々に新しく生まれ変わる」ということであった。私にしかない価値を見出すために思ったことは、「あのようになりたい」という人が身近にいれば夢は実現すると痛烈に感じたことだった。若ければ若いほど、人は環境や出会いによってまったく新しい生き方ができるものだ。また、強くイメージを想い膨らませ、思考を実現させるために徹底的に努力し、「自身の壁」を打ち破ることだ。

先輩だより



しのぶの妻
シルバポイアント

「見るまえに跳べ」

上田 勇一
(松山聖陵高等学校出身)
建築学科第26期生
画家

だの嫌悪する存在でしかなかった。しかし、人との出会いによって内側のエネルギーを起爆剤とし、行動を起こしたのだ。音楽家、写真家、画家、建築家、陶芸家、デザイナー

ちんと目標を明確にし集中的に力を入れることによって、自分でも想像すらできなかった世界が導きだされてしまふことがよくあった。「崖を下り、隘路を越え、山々の峻険をのぼって

募集 専修免許取得 の公開講座

7月26日(8月8日、本学主催の「文部科学省認定・免許法公開講座」が学内で開催される。

本講座は①高等学校教諭専修免許(工業)②中学校教諭専修免許(技術)の取得を目指すもの。専修免許取得に必要な単位数は、平成16年3月31日迄は取得単位数が少なく済む通減措置が適用され、本講座は通減措置適用の最後の機会となるものである。

募集 中学校「技術」 実技研修講座

中学校「技術」担当教員実技研修講座が7月28日から31日まで、本学技術科実習室で開催される。

本学と全日本および東京中学校技術家庭科研究会の共催によるもので定員30名。内容は、中学校技術・家庭科技術分野Aの技術とものづくりに関わる実技研修と評価法の研究。費用2千円で、受講証明を発行する。問合せ先は本学技術科研究室木崎康男教授、工業教育研究所長木村寛治教授。(電話0480-333-7512)



●太陽光発電の説明を聞L.C.C.校一行

カナダL・C・Cおよびモンゴルから 国際交流

■カナダから 4月9日、本学協定校であるカナダL・C・C学務部長カレン・バーンズ女史が本学を表敬訪問した。学内見学の後、学長、教務部長以下本学首脳と両校の協定関係について話し合いを行った。

■モンゴルから 4月上旬、モンゴル政府の関係者が、太陽光発電の基礎教育を受けるために来日。その一環として4月10日には本学を見学、発電実績等の説明を受けた後、施設を見学し、活発な質疑をするなど有意義な時間を過ごした。

先輩来訪

4月18日、本学園監事小笠原昭次氏以下15名の東京工業高校第10期卒業生が本学の施設見学に訪れた。一行は太陽光発電システム等を見学後理研室に於いて本学鈴木総務部参事、藤田総務部長と昼食、懇談を行った。

人事異動

【異動】(4月1日付)
◆鈴木昭正 総務部長・総務部参事
【任命】(4月1日付)
◆教務部補佐 石川孝教授
◆機械工学専攻幹事 横谷真一郎教授(新任)
◆情報工学専攻幹事 神力正宣教授(再任)
◆工業技術博物館長 松野健一教授(再任)
◆工業教育研究所長 木村寛治教授(再任)
◆機械工作センター長 酒井茂紀教授(再任)
◆電気実験研究センター長 森宮

平成14年度 文部科学省の補助金決定

平成14年度私立学校施設整備費補助金および私立大学等研究設備整備費等補助金の交付が次の通り決定した。また平成14年度から制度化された「私立大学教育研究高度化推進特別補助」についても決定した。

【研究設備】
「高感度レーザー誘起蛍光分析装置」電気電子工学科森宮脩教授(事業経費33,796,350円、補助内定額21,404,000円)、例えば接点アークやプロセスプラズマの中性粒子密度、あるいは微量の有害環境物質計測には高い感度を有するレーザー誘起蛍光法(LIF)が有効である。本装置は、光源部に相当する波長可変レーザーとLIF光を高感度、高時間分解検出するイメージングシステムをコア部を中心に構成され、この

【研究装置】
「ベンチャービジネス支援型耐環境電子デバイス研究装置」システム工学科鈴木敏正教授(事業経費294,987,000円、補助内定額147,493,000円)、本装置は、III族窒化物半導体薄膜を用いて、例えば自動車のエンジンルームのような過酷な高温環境下でも動作する新しい耐環境電

【情報技術センター】
◆情報技術センター長 榑澤康夫教授(再任)
◆先端材料技術研究センター長 村川正夫教授(再任)
◆建築技術研究センター長 桑原文夫教授(再任)
◆超高压放電研究センター長 佐伯正盛教授(再任)
◆保健体育センター長 小林勉教授(再任)
◆生涯学習センター長 廣瀬治男教授(再任)
◆スチューデントラボ所長 黒津高行教授(新任)

【星野坦之教授システム工学科】
出張先「タイ」(4/16~4/23) 目的「論文審査及び研究打合せ」
◆神林靖講師情報工学科/出張先「フランス」(4/22~5/2) 目的「JAI International Conference on Enterprise Information Systems」にて論文発表「Bordeaux大学 Charles Courau教授訪問」
◆村川正夫教授機械工学科/出張先「ドイツ」(4/24~5/3) 目的「ドイツFraunhofer IPTでのダイヤモンドコーティング技術調査並びに米国のICMCTF2003国際会議にて研究発表」
◆神雅彦講師機械工学科/出張先「米国」(4/26~5/2) 目的「ICMCTF2003国際会議にて研究発表」
◆渡部修一教授(システム工学科)/出張先「米国」(4/26~5/2) 目的「ICMCTF2003国際会議にて研究発表及び座長」
◆竹内貞雄助教先端材料技術研究センター/出張先「米国」(4/26~5/2) 目的「ICMCTF2003国際会議にて研究発表」

【海外出張(3月~4月)】
◆伊藤庸一教授建築学科/出張先「スリランカ」(3/8~3/15) 目的「スリランカの民家と水環境調査」
◆黒津高行教授建築学科/出張先「タイ」(3/11~3/19) 目的「パタン市仏教僧院街の復興的研究」
◆渡辺康夫教授(電気電子工学科)/出張先「米国」(3/26~4/1) 目的「サフミリ波利用インシチュカセンサに関する研究成果の発表」
◆大木幹雄助教情報工学科/出張先「韓国」(4/8~4/10) 目的「日韓IT人材交流プロジェクトに係る韓国大学生の技術レベル調査」

編集後記

少し季節感がなくして申し訳ないが、4月末に、ご父母の集まりである後援会青森県支部総会とそのOBを主体とする青森OB会への出席のため弘前市に出張し、満開の夜桜を見てきた。この全国でも有名な弘前城の桜は本当に見事で、ソメイヨシノやシダレザクラに埋め尽くされていた。城内は幽玄の世界のように思え、華やかでありながら何か栗とした緊張を覚え、西行の歌「願はくは花の下にて春死なむそのきさらぎの望月のころ」を思い出していた。近年、青森県からの入学者が少し減少気味で心配しているが、この数年はとくに西日本からの入学者が少なくなっている。本年でも14県からは入学者がゼロであった。本学は、「日本工業大学」の大学名のとおり全国区の大学として開学以来、広く全国から入学者を集めてきたが、昨今の状況からなかなか難しい時代に入った。そんな中、今回のように大学を積極的に支援してくださる後援会、工友会の外郭団体に對してあらためて感謝申し上げたい。(F)